

英語学習における弛緩性の情緒の役割

— 大学生における英語学習評価と情緒表現型の関連性からの検討 —

安藤 則夫^[1], 長谷川 修治^[1]

[1] 植草学園大学発達教育学部

従来、情緒的覚醒は、活動水準の高低として一次的に把握されてきた。しかし情緒的覚醒を認知機能と関連した3次元（緊張、興奮、弛緩）から見ることで、学習における情緒の役割を明確にし、情緒を学習の促進をもたらす要素として活用する道を開くことになると考えられる。今回は特に、3つの情緒の中の弛緩性の情緒に焦点を当てその重要性について検証を試みた。アンケートによって得たU大学の学生の中学高校での英語学習への感想と学生の情緒表現型の関連性から見ると、弛緩型の学生は、英語学習に対する好感度・得意度が高くゆとりを持って英語学習を受け容れていると推測された。また3つの情緒がバランスよく現われている均衡型の学生には、英語学習の様々な活動を好んで行っている傾向が見られた。このことから、弛緩性の情緒に学習に対する受容性を増す機能や状況に対応して情緒状態を転換させる機能があると推測された。また3つ情緒がバランスよく現れることが、様々な学習活動に積極的に取り組む姿勢を促すと示唆された。

キーワード：英語学習評価、3つの情緒表現型、認知機能、弛緩性の情緒、学習活動の受容

1. はじめに

1.1 情緒表現型を考える

2020年から導入される学習指導要領では、外国語学習の開始が現行の小学5年生から3年生へと引き下げられる予定である。小学校での英語教育がさらに充実することになる。この動向に合わせて筆者らは、最良と考えられる学習形式を定式化した小学生用の英語学習プログラムを作成してきた(長谷川・安藤, 2014)。それは、教師の負担を軽減しながら、児童によりよい学習環境を提供する試みである。

一方、著者らが所属するU大学の学生の声を聞いてみると、英語が嫌い、不得意と言う学生が多かった。これは、中学・高校ですで行われている英語教育について反省する必要があることを示している。

著者の一人、安藤(2007)は発達障害児の情緒表現を変えることで、子どもの学習能力を高める実践

を行ってきた。例えば、自閉症スペクトラムの子の定型的な情緒表現を弛緩性の表現によって和らげることで、穏やかに人と付き合えるようにし、人からの学習を促進してきた。情緒表現を変えることで対人関係を変化させ、学習への望ましい取り組みができるようにしたのである。

このような試みから、英語学習を促進するために児童の情緒表現を変える教授法が考えられる。例えば、怒りっぽい子を微笑しながら息を抜かせ、心穏やかにして勉強できるようにすることなどである。

1.2 情緒の働き

情緒は、認知機能・学習に大きく影響していると考えられている(Tyng, et al., 2017)。以前、情緒は精神を混乱させるものにとらえられていたが、次第に行動を組織化すると主張されるようになった(Leeper, 1948)。Duffy(1948)は、情緒を連続

的に変化するエネルギー量としてとらえ、動機づけの強さと方向性を決めると考えた。情緒の有用性が認められたのである。ただ情緒をエネルギーの放出と捉えることから、エネルギーが放出され緊張が低下した時に快を感じると考えられるようになった (Sroufe and Waters, 1976)。

情緒が情報処理の質的な面にどのように影響しているかといった研究も始まった。例えば、Fredrickson (2001) は、肯定的な感情が、積極的な取り組みを促すだけでなく、注意の幅を広げると主張している。一方、肯定的情緒が注意の集中を妨害しているとする研究も行われている (Gable and Harmon-Jones, 2010)。また、情緒的に落ち着いた状態で様々な要素を関連づける学習が促進されるという研究もある (Mather, et al., 2006)。

情緒が認知機能の質的な違いをもたらすことが分かってきたが、今までは、情緒を覚醒水準の高低、快不快の二次元の観点でしか捉えられておらず、まだ情報処理と情緒の関係が明確になっていなかった。

1.3 3つの情緒表現型と認知機能

安藤(2007)は、乳幼児の情緒表現の発達を観察し、情緒表現をシステマティックに捉えることで、情報処理過程への情緒の影響が分かりやすくなることを見出した。そして、情緒表現型と注意の機能が連動していることに注目して、情緒表現型を3つの次元(緊張、興奮、弛緩)で捉える「3つ情緒論」を提唱した。

その1つは、「緊張性の情緒」である。身体を固くして不快や快を表現する情緒である。例えば、快を感じて喜ぶ場合、その対象に集中しながらキーンと固い声を出し身体を固くして喜ぶ。この情緒には注意を集中(狭小化)させ、認知を固く維持させる働きがある。適度に表現されれば、真面目に学習に集中する態度を促進する。しかし、この情緒が極端に現われると、周りが見えなくなくなり、特定のことに固執するという自閉的な行動の形成要因となる。この情緒が優勢な人を「緊張型」と呼ぶ。

もう1つは「興奮性の情緒」で、身体運動の活発化を伴う快不快の表現となる。例えば、喜んでピョンピョンとはしゃぎまわるという形で現れる。この情緒は、注意の転導を促し、多方面からの情報収集

を助ける。適度に表現されれば、元気で活発な活動や細かいことに拘らない楽天さをもたらす。しかし、この情緒が極端に現われると、落ち着きのなさや衝動的行動を引き起こし、じっくり学習する行動を阻害する。せつかく学んだことも忘れやすくなる。この情緒が優勢な人を「興奮型」と呼ぶ。

もう1つは、「弛緩性の情緒」で、身体をリラックスさせながら快不快を表現する情緒である。例えば、「ああよかった」という感じの満足感として現れやすい。この情緒は、心のゆとり・安心感をもたらし、注意の幅を広げ、柔軟な思考や新奇な情報の受容性を増す働きを持つ。また、学習の際の納得感をもたらし、学習の定着を促す。この情緒では、不足する場合に不安が強まるという行動上の問題が生じる。この情緒が優勢な人を「ゆとり型」と呼ぶ。

このように情緒表現型は、注意を狭く集中させる、様々な方向に転換させる、注意の幅を広げるといった形で、認知や学習の仕方に影響する(安藤, 1998)。

言うまでもなく実際の情緒表現では、3つの情緒が純粋な形で表現されることはまれで、複合した形で表現される。情緒表現型も、どのような情緒表現が優勢かによって決められる。理想は、一人の人が状況に対応して、3つの情緒をバランスよく表現できることである。比較的バランスよく表現している場合を「均衡型」と呼ぶ。

1.4 3つの情緒表現型と認知機能

この3つの情緒論の有用な点は、情緒表現型に連動して認知形式が変わるので、情緒表現型を変えることで、認知形式(学習への取り組み方)を改善し、学習を促進できることである。

これまでは、発達障害を負った子どもへの働きかけにこの考えを活用してきた。例えば、自閉症児は緊張性の情緒が過度に優勢なために、注意の範囲が狭く様々な要素を関連づけられない特徴を持つ。そこで弛緩性の情緒表現を促すことで、自閉症児の興味の幅を広げ、人間の営みにも興味を持てるようにし、人からの学習を促進するという成果を得ている(安藤, 1980)。

ADHD の場合は、興奮性の情緒が優勢なので、やはり弛緩性の情緒を引き出すように働きかければ、ゆつたりと学習に取り組めるようになる(安藤, 1984)。

発達的に見ると、緊張性の快表現は生後1～2ヵ月頃、興奮性の快表現は生後3～4ヵ月頃、弛緩性の快表現は生後6～7ヵ月頃に現れる(安藤, 1981)。弛緩性の快表現が最も遅く現れるために、他の情緒と比べて現れにくいと言える。しかし、弛緩性の快表現が現れることで、ゆったりとした人との付き合いが可能になり、社会性の発達が促進される。発達障害児の発達促進には、欠かせない情緒と著者は考えている。

英語学習に関しても、児童の情緒表現型を変えることで、学習の取り組み方を促進する方法が考えられる。学習者の情緒状態を学習に最適な状態にする試みは現在すでに、コンピューターによる個別的学习プログラムによってなされている(Chaffar and Frasson, 2004)。それは、初めに学習者の性格と現在の情緒状態をチェックし、学習活動を最善化する最適な情緒を選ぶ。小話を聞かせたり、イメージ(絵)を見せたり、音楽を聞かせたり、特定のイメージを思い描くように誘導して学生の情緒状態を最適化するというものである。例えば、外向的な学生にとっては喜びが最適の状態であり、その状態になるように導く。最近では、情緒を二次元的にとらえる見方は変わらないが、人間の教師の教え方に近くなってきている。すなわち、学生の反応や表情をモニターして、飽きや嫌気を察知したら声の調子、しぐさを変化させ、励まし・推薦・感謝の言葉かけをするようになってきている(Malekzadeh, Mustafa and Lahsasna, 2015)。学習時に引き出す情緒は、適度な肯定的情緒である。

2. 目的

2.1 仮説の設定

安藤(2007)は、情緒表現型が情報処理の仕方に影響することから、情緒表現を変えることで、情報処理の仕方を変え、英語学習を促進できると考えた。今回の研究は、その前段階として次の仮説を確認することを目的とした。

仮説: 3つの情緒論を基にした情緒表現型は、認知機能に関連しているため、情緒表現型が違えば、英語学習の受け取り方、取り組み方も変わるであろう。特に弛緩性の情緒を優勢に示すゆとり型の学生は、

英語学習に対して柔軟な対応ができると予想される。

この仮説が確かめられれば、弛緩性の情緒を引き出すという形で学生の情緒型を変化させ、英語学習への取り組みを最適なものにする試みも妥当性があることになる。

2.2 各情緒表現型に関する仮説

情緒表現型の違いにより現れる英語学習への取り組み方の違いは次のように予想される。

緊張型の学生は、集中して学習に取り組むので、英語学習を得意と感じる者が多いだろう。

興奮型の学生は、多様に変化する社交的な活動を好み、活発な表現を得意とするだろう。

ゆとり型の学生は、ゆったりと柔軟に対処するために、異なる内容を受容することが得意であると考えられる。

均衡型の学生は、活動に合わせた情緒状態になりやすく、様々な活動に適応しやすいと考えられる。

以上の予想も合わせて確かめたい。

3. 方法

3.1 アンケートの概要

2017年7月3日、心理学の性格の授業時間に、性格と英語学習の関連を調べると説明し、参加した学生にアンケートを依頼した。

3.2 アンケートの内容(英語学習の感想)

内容は、表面に、中学・高校の時の英語学習に対する好き嫌いと得意不得意に関する質問を配し、裏面に3つの情緒表現に基づく情緒表現型に関する質問を配した(参考資料)。

表面の質問項目は、以下の通りである。

年齢、性別を問う質問。

中学・高校での英語学習の好き嫌いを「かなり好きであった、まあまあ好きであった、それほど好きでなかった、嫌いだった」の4つの選択肢から答えてもらった。本論では簡便化のために前の2項目を「好き」、後の2項目を「嫌い」の回答とした。さらに英語学習の活動で好きだったことに○、嫌いだったことに×をつけてもらった。活動は次の通りである。

「英語を聞くこと、英語を話すこと、英文を読む

で理解すること、英作文、単語を覚えること、短文を覚えること、文法を覚えること、英語の映画を見ること、外国の人と話ができることと想像すること、外国に旅行することを想像すること、英語の歌を覚えること、歌うこと、先生と英会話すること、友達と英会話すること、英語劇を演じること、英語の試験問題をすること」

なお「単語を覚えること、短文を覚えること、文法を覚えること」の3項目は「覚える」項目にまとめた。「英語の映画を見ること、外国の人と話ができることと想像すること、外国に旅行することを想像すること、英語の歌を覚えること、歌うこと」の5項目は「楽しむ」項目にまとめた。「先生と英会話すること、友達と英会話すること、英語劇を演じること」の3項目は「活用する」項目にまとめた。さらに「他に英語の勉強で好きだったこと、嫌いだったことがあれば書いてください」「『好き・嫌い』になった理由、原因がありましたら書いてください」という質問に自由筆記してもらった。

次に中学・高校での英語学習の得意不得意を「かなり得意だった」「まあまあ得意だった」「それほど得意でなかった」「不得意だった」の4つの選択肢から答えてもらった。本論では簡便化のために前の2項目を「得意」、後の2項目を「不得意」の回答とした。さらに得意だった活動に○、不得意だった活動に×をつけてもらった。活動は次の通りである。

「英語を聞くこと、英語を話すこと、英文を読んで理解すること、英作文、単語を覚えること、短文を覚えること、文法を覚えること、英語の歌を覚えること、歌うこと、先生と英会話すること、友達と英会話すること、英語劇を演じること、英語の試験問題をすること」

「単語を覚えること、短文を覚えること、文法を覚えること」の3項目は「覚える」項目にまとめた。「英語の歌を覚えること、歌うこと」の2項目は「楽しむ」項目にまとめた。「先生と英会話すること、友達と英会話すること、英語劇を演じること」の3項目は「活用する」項目にまとめた。さらに「他に英語の勉強で得意だったこと、不得意だったことがあれば書いてください」「『得意・不得意』になった理由、原因がありましたら書いてください」という質問に自由筆記してもらった。

3.3 アンケートの内容 (情緒表現型)

裏面には「あなたの情緒傾向を調べてみよう」という表題で、10の状況における行動の三択問題を提示した。

各々の枠の中に、「集中・固さの情緒（本論では緊張性の情緒）」、「注意転換・活発さの情緒（興奮性の情緒）」、「ゆとり・柔軟性の情緒（弛緩性の情緒）」という3つの情緒を基盤とする行動が書かれ、その中から一番自分に合う文を強制的に選ぶという形式である。例えば、最初の枠には「A読書や勉強、事務的仕事に集中できる。時間の立つことを忘れることが多い」「B読書や勉強、事務的仕事をする時、飽きやすいし、余分な考えが浮かび集中できない」「C読書や勉強、事務的仕事をして、何かが分かたたりして、満足感を感じる」という3つの文がありどれか一つ選ぶ。10の枠があり、最後に選んだABCの数をそれぞれ合計し、下の枠にその数字を記入する。3つの枠の中で多い数字の枠が、自動的に各自の優勢な情緒表現型を示すようになっている。

10の質問のうちある1つの情緒表現型が他の型よりも2以上多ければ、その特徴を優位な特徴とした。組み合わせとしては、(10, 0, 0), (9, 1, 0), (8, 2, 0), (8, 1, 1), (7, 3, 0), (7, 2, 1), (6, 4, 0), (6, 3, 1), (6, 2, 2), (5, 3, 2)がある。2つの情緒表現型が共に優位である場合は、複数優位とした。組み合わせとしては、(5, 5, 0), (5, 4, 1), (4, 4, 2)がある。その他、3つの情緒表現型がほぼ同数である場合は、均衡型とした。組み合わせとしては、(4, 3, 3)がある。今回は、それぞれの情緒表現型と英語学習への取り組み方に焦点を当てるために、複数優位の学生は省き、単独優位型と均衡型の学生についてのみ考慮した。

3.4 倫理的配慮

アンケートを実施するにあたり、その趣旨と用途について学生の了解を得た。また個人情報には一切触れていない。

4. 結果

4.1 アンケート結果の概観

アンケートに回答した学生は合計で、111人で

あった。うち、緊張型は21人、興奮型は15人、ゆとり型は21人であった。均衡型は、15人であった。記入漏れがあり不採用となったのが、10人であった(表1)。複数優位型29人は、個々の考察から省いた。

なお、情緒表現型によって人数が異なるだけでなく、項目によっても回答者数が異なるために、項目ごとに好きと答えた学生の百分率を好感度、得意と答えた学生の百分率を得意度として表2にまとめた。なお項目ごとに回答数が異なったり、回答数が少なかつたりして統計処理が困難であったので特徴的な結果に注目しどのような傾向が見られるかという推測の範囲に考察を留める。

アンケートの全体的結果を見ると、中学や高校の時の英語学習が嫌い不得意であったという学生が8割を占めていた(77.2%, 80.8%)。

4.2 それぞれの情緒表現型の特徴

英語学習が嫌い・不得意とする学生が圧倒的に多い中で、ゆとり型の学生では、他の情緒表現型の学生に比べ、好きと答えた比率が高かった。一方、緊張型・均衡型の学生は、英語学習が好きという学生の割合が少ない方であった。

英語学習全体に対する得意に関しては、情緒表現

型による差がそれほどなかった。

緊張型の各活動に対する好感度は、予想に反して低い傾向を示している。得意面でも高くなかった。ただ聞くと試験は、得意とする学生の割合が多少高かった。

興奮型は、話す、楽しむを好む割合が高かった。読む、書く・覚える、試験を好む学生は少なかった。特に試験を好きな学生はいなかった。得意な活動については、楽しむ・話すがほぼ同じ程度で興奮型の中では割合が少し多かった。書く・試験を得意とする学生はいなかった。

ゆとり型では、書く・試験を除いて、好きな割合が他の情緒表現型と比べて高い活動が多かった。しかし、書くが好きと答えた学生はいなかった。得意な活動については、楽しむ、聞く、読む、覚えるが比較的高い割合であった。書くを好き・得意と答えた学生はいなかった。

均衡型の学生は、英語学習全体を好きと答える学生の割合は集中型と同様に低い方であったが、個々の活動を見ると好きな学生が高い割合を示していた。特に、聞く、楽しむ、読むが高い割合を示していた。ただし、好きと答えた割合が高かった聞くは、不得意とする学生の割合が一番高かった。

表1 アンケートの全体的集計

人数	総合		緊張型		興奮型		ゆとり型		均衡型		緊張興奮複合型		興奮ゆとり複合型		緊張ゆとり複合型	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
101			21		15		21		15		12		11		6	
男女	36	65	10	11	8	7	3	18	5	10	4	8	2	9	4	2
英語学習	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い
好き嫌い	23	78	3	18	3	12	7	14	2	13	4	8	2	9	2	4
英語学習	得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意
得意不得意	19	80	4	17	2	13	4	15	3	12	3	9	1	10	2	4

表2 性格特性別の集計 (回答の実数, 好感度(%) = 好き数 ÷ (好き数 + 嫌い数) × 100, 得意度(%) = 得意数 ÷ (得意数 + 不得意数) × 100)

人数	総合			緊張型			興奮型			ゆとり型			均衡型		
	好き	嫌い	好感度	好き	嫌い	好感度	好き	嫌い	好感度	好き	嫌い	好感度	好き	嫌い	好感度
英語学習(全体)	23	78	22.8	3	18	14.3	3	12	20.0	7	14	33.3	2	13	13.3
聞く	31	38	44.9	5	13	27.8	3	10	23.1	8	4	66.7	7	2	77.8
話す	23	51	31.1	5	13	27.8	6	6	50.0	5	8	38.5	3	10	23.1
読む	21	55	27.6	4	14	22.2	1	11	8.3	5	8	38.5	5	6	45.5
書く	8	71	10.1	1	19	5.0	1	12	7.7	0	15	0.0	3	8	27.3
覚える(3項目)	48	184	20.7	10	47	17.5	3	35	7.9	12	32	27.3	14	18	43.8
楽しむ(5項目)	200	154	56.5	32	51	38.6	26	37	41.3	45	12	78.9	30	22	57.7
活用する(3項目)	39	175	18.2	8	44	15.4	4	33	10.8	10	30	25.0	6	23	20.7
試験	7	71	9.0	1	18	5.3	0	11	0.0	1	14	6.7	4	8	33.3
得意不得意	得意	不得意	得意度	得意	不得意	得意度	得意	不得意	得意度	得意	不得意	得意度	得意	不得意	得意度
英語学習(全体)	19	80	19.2	4	17	19.0	2	13	13.3	4	15	21.1	3	12	20.0
聞く	22	47	31.9	6	12	33.3	1	9	10.0	6	7	46.2	1	9	10.0
話す	11	59	15.7	2	14	12.5	3	8	27.3	1	11	8.3	2	8	20.0
読む	23	58	28.4	4	13	23.5	2	9	18.2	7	10	41.2	4	9	30.8
書く	10	65	13.3	3	16	15.8	0	10	0.0	0	15	0.0	3	8	27.3
覚える(3項目)	66	174	27.5	9	46	16.4	5	29	14.7	16	36	30.8	12	22	35.3
楽しむ(2項目)	64	82	43.8	4	29	12.1	6	15	28.6	19	10	65.5	9	13	40.9
活用する(3項目)	28	174	13.9	8	43	15.7	5	29	14.7	3	37	7.5	3	27	10.0
試験	10	58	14.7	4	13	21.1	0	11	0.0	1	11	8.3	2	9	18.2

4.3 自由記述の結果

自由記述では、「他に好きな活動・嫌いな活動」「英語学習が好き・嫌いになった理由」「他に得意・不得意な活動」「英語学習が得意・不得意になった理由」の4項目に応じてもらった。上記の4つの情緒表現型の学生の総回答数は、81であった（「特になし」など無回答型の回答は除外した）。

好き嫌いと得意不得意で回答傾向はほぼ同じなので合わせて報告する。

アンケート以外で好きな活動は、ゆとり型で「塾での特訓, 英語のクイズ」, 均衡型で「長文理解, チーム対抗の単語書き出し, ALTの授業」が挙げられた。得意な活動では、ゆとり型で「長文とリスニング」, 均衡型で「長文読解, 単語」が挙げられた。嫌い不得意をまとめて見ると、緊張型で「作文, 文法, 全体」, 興奮型で「記憶2人, 人全体3人, 単語記憶」, ゆとり型で「全体3人, 文法3人, リスニング」, 均衡型は「短文記憶, 長文2人, 全体, 並べ替え」が挙げられた。

好き得意の理由としては、緊張型で「塾での英会話」, 興奮型は「ALTとの会話」, ゆとり型では「ALTが面白い, 先生が面白い」, 均衡型では「先生の教え方, 塾での特訓」が挙げられた。

嫌い不得意の理由としては、緊張型で「全体的理解困難8人, 文法2人, テスト, 単語, 作文, 不勉強」, 興奮型で「全体的理解困難5人, 先生3人, 他国の言葉2人, 記憶, 単語, 中学の英語, 不勉強」, ゆとり型で「文法4人, 全体的理解困難, 単語記憶, 先生, 不勉強, なんとなく」, 均衡型で「全体的理解困難6人, 単語記憶, テスト, 不勉強」が挙げられた。

5. 考察

5.1 アンケート結果に対する全体的考察

アンケート結果から、学生が中学や高校の英語学習にかなりの不満を持っていることが分かった。U大学だけに英語嫌いの学生が集まったとは思われないので、全国的にも英語学習を嫌いと思う学生が多く存在すると推測される。このことは、中学高校の英語教育がうまく行っていないということを示していると思われる。小学校から英語教育を行う流れに

なっているが、今までの英語教育の中身について真剣に考え直す必要があると思われる。

嫌い不得意の理由として全体的理解困難と回答した学生が多いことから、分からない状態が長く続いたのではないかと思われる。たぶん英語教育の初期段階で英語がよく分かるようにすることが大切ではないかと思われた。つまり初期の基礎的な部分に慣れ、そこがよく分かっていたら、その後も英語学習について行きやすくなるだろう。

5.2 情緒表現型と学習への取り組み方

嫌い不得意の学生が多いことから、U大学の学生にとっては中学高校での英語授業が辛いものであったと推察される。学生が不利な状況を経験してきたことを想定して、各情緒型の回答について検討する。

緊張型の学生は、集中して持続的に学習することが出来るので、英語学習を好き得意とする学生が多いと仮定された。しかし試験に関して得意とする学生が他の型よりも割合は多かったが、全体的結果は予想に反し、英語学習を好き・得意と答えた学生の割合は多くなかった。

これは、緊張型の学生は集中して学習できるという仮定が間違っていたわけではないと考えられる。緊張型の学生は、好んで集中できる学習対象であれば集中し、学習が好き得意だと回答する割合が増えたはずである。しかし、好きなことに注意が狭小化するために許容範囲が狭くなり、少しでも英語学習が受け容れられないとなると、受け容れられない姿勢が増してしまい、学習に打ち込めない結果になってしまったと考えられる。

緊張型の学生には、他の型の学生以上に「好きな内容」が与えられるか、学生自身のペースが尊重されることが大切と思われる。

興奮型は、予想通りに社交的な活動を好む傾向が見られた。話すことが好きであるのはその例証であろう。自由記述でも、先生の要因をあげている。人間関係に大きく影響されると思われる。また自由記述から、記憶が好きでない面がうかがわれ、英語学習全体に対して得意は最低であり、英語学習に向いていない情緒表現型と言える。

ゆとり型の学生では、英語学習を好きで得意と答える割合が比較的多かったが、ゆとりを持って柔軟

に授業を受け容れているためではないかと考えられる。楽しむ活動を好きであり得意と感じている点も、注目すべきであろう。書くを除いて、個々の活動も肯定的に受け入れる傾向がある。

ゆとり型の学生は受容性が高い、という予測はある程度当てはまると考えられる。書くという努力の要する活動を除いて、少し苦手と感じても、ゆったりした姿勢で学習できれば、受け容れられるのであろう。このことから、リラックスした情緒表現を重視して授業を進めることで、授業を肯定的に受け入れる学生が増えると考えられる。ゆったりした状態には、情報を整理し学習内容を記憶に定着させる働きがあるのである。

自由記述からは文法を嫌い不得意とする学生が多く、じっくり学べなかったことがうかがえる。

均衡型では、英語学習全体としては、好きが少ないのに、個々の活動を好きと答える学生の割合が多かった。それは、情緒表現に偏りが無いために、個々の活動に適合した情緒を発揮して学習に打ち込めたからではないかと思われる。例えば、集中が必要な時には集中し、表現する時には活発になり、学習したことをじっくりと振り返る時にはリラックスできたのではないか。そのため書くという努力を要する活動にも積極的に取り組めたと思われる。

ゆとり型は、肯定的に英語学習を捉え受け入れているので、特に学習に慣れていない初期段階や新奇な学習を導入する時には、リラックスした喜びを引き出しながら学習を進めることが大切であろう。

5.3 学習時のゆとりさ

勉強する場合、集中することが大切だと考えられるが、今回、緊張型は学習を好む点で結果は良くなかった。この型は、うまく行っている時にはその特色が生かされるのであろうが、学習が難し過ぎたり面白くなかったりすれば、嫌だと感じる気持ちが強く出て、低迷する結果となってしまうのであろう。一方、面白くなくても適応できるためにはゆとり型が合っていると言える。

ゆとりさと似ている平静な心の状態は、学習を促進するのに役立つと言われている。マインドフルネス瞑想を取り入れることで認知機能が伸びるという研究 (Chiesa, Calari and Serretti, 2011)

からも、このことが推察される。静観的教授法 (Contemplative Pedagogy) を進める人たちも何かの努力をせずに思いに注意を向けることで深い気づきを得られるとしている (Brady, 2007)。また特に努力せずに「思いを頭にとどめること」 (an open monitoring of internal and external stimuli) が深い気づきのために良いという (Chiesa, Calati, & Serretti, 2011)。著者らのデジタル教材でも、英文を聞いて、10秒ほど沈黙してから複唱するようになっている。ゆったりした状態の中で情報を自分なりに整理できた方がよいと考えたからである。しかし、その沈黙の時間にどれほどの効果があるかを判定することはまだ出来ていない。

5.4 学習状況に合わせた情緒の変化

英語学習と言っても、様々な活動が含まれている。教師の説明を聞いたり、本を読んだりするといった集中力を必要とする活動や人の話にテキパキと対応しながら話をするといった活発さを必要とする活動、じっくりと学んだことを整理し記憶に定着させるためのゆとりさを必要とする活動などである。1つの授業の中で、3つの情緒が状況に合わせて現れることが必要なのである。

弛緩性の情緒には、心を柔軟にすることで、各々の情緒の切り替えを促進する機能がある (安藤, 2007)。弛緩性の情緒があることで多様な学習形態に対応できるわけである。授業の中では、ゆとりを基調としながら、緊張 (集中) —興奮 (活発な表現) —弛緩 (反省・情報整理) といった情緒表現の流れを作るという教える側の姿勢が大切である。

5.5 今回の研究の問題点とこれから

今回の研究では、各情緒型がどのように学習に取り組んでいるかを明確にはできなかった。それでも、各情緒型の傾向はある程度掴めたのではないかと思われる。これから、もっと明確に情緒型と学習への取り組み方が判別できるように工夫していかなければならないであろう。例えば、もっと好き嫌いや得意不得意に偏りのない集団を対象とするか、アンケートにおいて情緒型の特徴が出やすい質問にするといった改良が必要であろう。

また、今回は学生の感想に基づいて考察を行っ

た。実際の成績を見ていないので、不得意という判断がどれほど実際の能力を反映しているのか判断できない。感想を聞くと同時に、実際に英語のテストも受けてもらい実力と比較した方が良かったと思われる。

安藤 (2007). は、情緒表現の仕方を変えることで、行動の仕方が変わると考えた。今回の結果から、弛緩性の情緒を引き出せば、教育環境が多少悪くても、柔軟に学習を受け容れられるようになるということが推測された。さらにこれからの課題としては、授業の中で、いかに望ましい情緒を引き出すかを考えることである。例えば、授業の中で教員がジョークを言うことも、学生の情緒状態を変化させる試みと言える (Chaffar & Frasson, 005)。

6. 結論

6.1 中学高校の英語教育

第一に考えなければならないのは、中学高校の英語学習を嫌い不得意とする学生が多いと予想させる点である。もっと学生の気持ち (情緒) に配慮した教育が必要と思われる。また理解できなかったという学生が多いので、初期段階でじっくり理解できるようにすることが大切と思われる。

6.2 全体的に必要な情緒表現

学習するためには、全体としてリラックスした情緒表現によって受容的で柔軟な気持ちを作ることが望ましいと考えられる。そのような情緒状態を基盤にしなが、集中すべきところで集中し、活用すべきところで活発になり、学習結果を定着させるところでゆったりできるようにすると良いであろう。

謝辞

本研究は、植草学園大学平成 29 年度共同研究の助成から補助をいただきました。ここに記して謝意を表します。

文献

- 安藤則夫, (1980). 「乳児期の情緒反応の発達と自閉的な子の変化」, 日本教育心理学会第 22 回総会大会論文集, 892-893.
- 安藤則夫, (1981). 「情緒発達の臨床的評価とその応用—乳児期の弛緩性の笑いを中心として—」, 立命館大学文学研究科修士論文.
- 安藤則夫, (1984). 「弛緩性の笑いをひき出すことによって対人関係を深め言語発達を促進した幼児の事例」, 小児精神神経学会第 52 回大会論文集, 11.
- 安藤則夫, (1998). 「発達遅滞児に見られる情緒表出」, 日本心理臨床学会第 52 回大会論文集, 416-417.
- 安藤則夫, (2007). 『スクスク子育て: 情緒発達から見た自閉症』, 東京, 学苑社.
- Brady, R. (2007). Learning to stop; Stopping to learn: Embarking on the Contemplative Learning path. *Journal of Transformative Education*, 5, 4, 372-394.
- Chaffar, S., & Frasson, C. (2004). Inducing optimal emotional state for learning in Intelligent Tutoring Systems. *Intelligent Tutoring Systems*, 7-21, Springer Berlin/Heidelberg.
- Chaffar, S., & Frasson, C. (2005). The Emotional Conditions of Learning. FLAIRS Conference, 201-206.
- Chiesa, A., Calati, R., & Serretti, A. (2011). Does Mindfulness training improve cognitive abilities? A systematic review of neuropsychological findings, *Clinical Psychology Review*, 31, 449-464.
- Duffy, E. (1948). Leeper's 'Motivational theory of emotion', *Psychological Review*, 55, 324-328.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. *American Psychologist*; 56, 218-226.
- Gable, P., and Harmon-Jones, E. (2010). The motivational model of affect: Implications for breadth of attention, memory, and cognitive categorization. *Cognition and Emotion*, 24(2), 322-337.
- 長谷川修治. 安藤則夫 (2014). 「学習効果の高い小学生用英語教材の開発—その詳細説明と試用試験による検証—」『植草学園大学研究紀要』第 6 巻 27-36.
- Leeper, R. W. (1948). A motivational theory of emotion to replace 'Emotion as disorganized response' *Psychological Review*, 55, 5-21.

MalekZadeh, M., Mustafa, M. B., and Lahsasna, A. (2015). A review of emotion regulation in Intelligent Tutoring Systems. *Educational Technology & Society*, 18, 4, 435-445.

Mather, M., Mitchell, K. J., Raye, C. L., Novak, D. L., Greene, E. J., and Johnson, M. K. (2006). Emotional arousal can impair feature binding in working memory. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 18, 4, 614-625.

Sroufe, L. A. and Waters, E. (1976). The ontogenesis of smiling and laughter: A perspective on the organization of development in infancy, *Psychological Review*, 83, 173-189.

Tyng, C. M., Amin, H. U., Saad, M. N. M., and Malik, A. S. (2017). The influences of emotion on learning and memory, *Frontiers in Psychology*, 24, 1-22.

参考資料 性格特徴を知るためのアンケート用紙

あなたの情緒傾向を調べてみよう。 各枠内でよくあてはまる文 (A,B,C) に○をつけてください。

A.	読書や勉強, 事務的仕事に集中できる。時間の立つことを忘れることが多い。
B.	読書や勉強, 事務的仕事をする時, 飽きやすいし, 余分な考えが浮かび集中できない。
C.	読書や勉強, 事務的仕事をして, 何かが分かたりして, 満足感を感じる。
A.	失敗すると腹立たしくなり, いつまでも原因をくよくよと考える。同じ失敗はしたくない。
B.	失敗すると腹立たしくなり, 歩き回ったり他のことをするなど落ち着きがなくなる。
C.	失敗すると悲しくなるが, 気を取り直しじっくりと考えて失敗しないようにがんばる。
A.	自分の得意分野の時は, 調子よく持論を話す, それ以外の話題では静かにしている。
B.	人の話を聞いていろいろ思いつき, 気軽に思いつきを喋る。にぎやかな会話を好む。
C.	話すときは, 相手の気持ちを考えながら, 感心したり共感したりして, 会話を楽しむ。
A.	部屋は, きちんと整理整頓するのが好きで, 散乱したモノや汚れが気になる。
B.	部屋は, たくさんのモノが乱雑においてありまとまらない。片付けなさいとよく言われる。
C.	部屋は, 大雑把に用途別に分類してモノを置いてある。ときどきは整理して満足する。
A.	1人でコツコツと好きなことをするのが好きで, 人とのつきあいで疲れを感じやすい。
B.	いつもと違うことをするのが好きで, 知らない人が来てもテキパキと対応できる。
C.	休憩を間に入れながら物事に取り組む。親しい人とのなごやかなつきあいを好む。
A.	これはきちんとしてほしい, 徹底してやりたい, とこだわる活動がある。
B.	様々な活動を, いろいろ思いを膨らませながら, 楽しむ。計画通りにはできない方だ。
C.	好きなことは, いくつか工夫したこと, いいと思うことをしみじみと感じながら行う。
A.	雑音は, 何かに集中していると気にならないが, 気になり出すとイライラする。
B.	雑音で気が散りやすく, 立ち歩いたり, 他に何か面白いことはないかと考える。
C.	雑音は聞こえても, 気にならない。騒音の場合には, 何か対策を考える。
A.	人から, マイペースだとか自己中心的だと言われることがある。
B.	人から, 元気だねとか, 社交的と言われることがある。
C.	人から, おだやかだねとか, ほがらかだねと言われることがある。
A.	仕事が次から次と与えられると, どれもきちんとできなくてイライラしたり, 停滞する。
B.	仕事が次から次と与えられると, この程度でいいだろうと考えたり, 人にやってもらう。
C.	仕事が次から次と与えられると, 優先順位や重大性に応じて重みづけをして行う。
A.	「～はこうしなければいけない」と原則や真の目的を固く守る方である。
B.	「これがだめなら, あれ」と一つの考え方にこだわらない。順調にできればいいと思う。
C.	自分の考えを活かしながら, 人と協調したり一致できる点を見出したりする。

それぞれの数を書いてください。

A 集中・固さ	B 注意転換・活発さ	C ゆとり・柔軟性

Abstract

The Role of Relaxed Emotion in Learning English: Consideration Based on the Relation Between the Evaluation on Learning English and Emotion Expression Type (EET) in University Students

Norio ANDO^[1], Shuji HASEGAWA^[1]

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

Previously, emotional arousal (ED) was thought to have only one axis of activity level. In this study, we assumed that there are 3 axes of ED related to attentional function: tension, excitement and relaxation. If we can find the particular emotional function that facilitates English learning, we will be able to apply emotions to it. We tried to verify the effectiveness of relaxed emotion for learning English. For this purpose, we administered a questionnaire asking university students about their experience of English education at junior high school and high school and their emotional expression type (EET) during said experience. The results showed that relaxed emotion types more easily participated in the various kinds of English learning activities. We also found that relaxed emotion facilitated emotional changes in accordance with different learning activities. Therefore, it was concluded that a relaxed flexible state induced by relaxed emotion may be the optimal emotional state for learning English

Keywords: Evaluation on Learning English, 3 emotion expression types, Attentional function, Relaxed emotion, Accepting various kinds of activity